

2025 年第 32 週の報告です。

今週も伝染性紅斑は京都府全国ともに警報レベルです。京都府の保健所別では、中丹西と山城北での報告数が増加し、すべての地域が警報レベルになりました。ほかに水痘が山城南と南丹が注意報レベルになっています。

全数報告対象疾患は結核が 4 件と腸管出血性大腸菌感染症・A 型肝炎・ウイルス性肝炎・侵襲性肺炎球菌感染症・水痘（入院例）がそれぞれ 1 件、日本紅斑熱とレジオネラ症がそれぞれ 2 件、百日咳が 16 件報告されました。

京都府における百日咳の週報告件数は、2025 年第 17 週（4 月 21 日～27 日）の 56 件をピークに増減を繰り返しながら緩やかな減少傾向にあり、第 32 週（8 月 4 日～10 日）はピーク時の 3 分の 1 以下にまで減少しました。しかしながら、本報告件数は、百日咳が全数把握疾患に分類された 2018 年 1 月以降で年間報告数が最多であった 2019 年の週報告件数の最大値（6 件）の約 2.7 倍に相当します。まだまだ気は抜けません。

百日咳は百日咳菌の感染によって発症する感染症で、患者の咳やくしゃみなどで感染します。百日咳は 0 歳児、特に生後 6 カ月未満の乳児が罹患すると肺炎や脳症を合併して重症化するリスクが高く、まれに致死的になります。乳幼児期にワクチンを接種することで罹患リスクを 80~85%程度減らすことができ、ワクチンの普及とともに百日咳の発生数は激減しました。現在は生後 2 か月から 5 種混合ワクチン（DPT-IPV-Hib）の定期接種が行われていますので、生後 2 か月を迎えた乳児へは速やかなワクチン接種が望まれます。本疾患は激しい咳を特徴としますが、成人やワクチン接種歴のある子どもでは症状が軽めに出ることもあり、診断が遅れることもしばしばあります。特に乳児に接する機会の多い方や出産予定の方は、咳が長引く際は、早めに医療機関を受診するようお願いします。